

## 創作についてのノート

一枚の葉の葉脈模様から森全体へ、森から大地全体へ、さらに大地から星へと画角が引きながら広がる光景、細部から全体へ一気に視点が変化する事で見出される美しさと構造に惹かれる。

俯瞰する事で見えてくる細部の役割を想像し、細部を描く時には全体のイメージを敢えて意識しない。

映画的な視点移動を繰り返し、細部と全体を行き来する事でその境界が曖昧になり、細部が全体を包み込むような感覚になると作品の全体像が掴めてくる。

求めるのは細部に宿る宇宙観であり、部分が全体を語る図像である。

描く事で普段目にする自然物や風景に宇宙を見出すこと、そこには何らかの秩序がある可能性を感じ、自分の周囲の世界とその本性を理解したいという欲求と、その必要性に駆られる。

動物や植物等の自然物をモチーフにする理由も、観察と観測から何かしらの法則を見出せるのではないかという期待があり、描写する事による変換の結果から偶然の表象が生まれ、そこに解答のヒントを感じ取る。

私達の周囲にあるもの全ては観察対象となり得るが、やはり自然物のディテールの複雑さは圧倒的に魅力的だ。

オブジェや風景を描いていて、無秩序の外観の背後にコードらしきものが垣間見えた時、我流の宇宙図を作成している感覚になり、星々や星雲の記録を書きとめるように細部の描写をする。

やがてディテールと全体の境が消え連続性が一つのループとなる。しかし作品の手掛かりとなる塊を捉えたと思った瞬間、新たな境界が見つかる。観測は続き、画面にはいくつもの境界が記される。そうなると空間に様々なベクトルが生まれ、作品の体を成してくるのである。

秩序と無秩序の境界。無数に存在する次元と次元の境界、ブラックホールのように全てを飲み込む桁違いな重力とその外側の境界、時間の進行方向の境界、素粒子の観測以前と以後。

我々生命活動にも生と死を始め多くの境界がある。

分たれた両者の端には際限がなく、細部の更に深奥と膨張し続ける宇宙の果ては、実は繋がっていると思えてくる。

そのループ内に無数に存在する境界には魅力的で多様な緊張状態を生み、その緊張こそ芸術の本質であり作品の核になるものであろう。

創作とは自分の中にある無意識の使命感と、例えようのない確信によって成り立つ。

現実的な必要事に支配される現代において、実用性を脱した思考に向かうことは自然の流れである。

描いたものに主義主張を持たせる意図はなく、手を動かしている時は祈りに近い感覚になる。

但し祈りの対象が存在しない宗教的無神論だ。

オートマニズムほど自動的ではなく、対象を細部まで観察する事で、動物の持つ深い感覚を模倣する、自己流のシャーマニズムとも言える。

絵を描く事は、自分が宇宙を理解できるという幻想を与えてくれるのだ。

私にとって作品は幻想と現実の境界にあり、現実から眺めれば理想に遠く及ばないと思い知らされる。

しかし創作の過程で捉えた感覚の記憶は僅かな期待をもたらし、宇宙図の断片となった作品は、次の創作の道標となるのである。

(喜田 直哉)